

第 2 回「素読について」

素読の意義。

本来の素読。

講義 加地伸行

「論語指導士」養成講座 第 2 回講義

論語教育普及機構 代表 加地伸行

今回は「素読^{そどく}」についてお話しいたします。

「素読」というのは、「素」という文字通りです。

例えば質素ということばもありますように、もともとの生地^{きじ}という意味です。

ですから人間が何も身に付けていない、それが「素」です。

しかし人間はその上に服を着たり、飾り立てて、中身が見えなくなってしまう。

そういうものを取り払った生地そのもの、それが「素」です。

「素読」と言いますと、『論語』なり、漢文などをそのままずっと読むこと、意味等々は考えずに読むということが、普通「素読」と言われております。

最近「素読」流行りです。声に出して読む論語などいろいろな形で、解釈や意味を考えずに、そのまま読めばいいという素読を薦めておられる方がたくさんおります。書店に行きますと、素読用の『論語』という本も並んでいます。

おそらく『論語』の書き下し文を声に出して読み、幼い子に教える、学校で一斉に読む。そういう方が多いと思います。それはそれでいいと思います。しかし本当の「素読」というものは、そういうことではありません。本当の素読は忘れられています。

本来の「素読」とはどのようなものかをお話しして、その上で現在の声に出して読む「素読」の良さをお伝えしましょう。

【素読吟味】

「素読吟味^{そどくぎんみ}」ということばがあります。「吟味」とは試験という意味です。「素読試験」です。ただ声に出して読むだけなのに、どうして試験があるのか。もうお気づきだと思いますが、どうやら「素読」の意味が、現在のそれとは違うのではないかと。昔はどうだったのでしょうか。

江戸時代、「昌平黌」^{しょうへいこう}（昌平学校、昌平坂学問所とも）という学校で、「素読吟味」が行われました。これは江戸幕府直轄の機関で後に大学になりました。JRの御茶ノ水の近くにあり、今も建物があり、活動しています。

江戸時代には、昌平黌^{しょうへいこう}へ全国の学生が学びに来ました。各藩から選抜され、藩の後押し、資金を出してもらって留学しました。14、15歳で学び始め、2、3年経って17、18歳で「素読吟味」を受けます。合格すると、証明書のようなものをいただいて、故郷へ帰り、各藩で学校の教員（助教）になっていく。そういうことが行われておりました。

それでは「素読吟味」はどんな試験だったのか。

これは内容の試験です。意味内容がわかっているかどうかの試験です。

並んでいる本から1冊抜き出し、適当に開いて、適当に指し、それを読みなさいというものです。

本当に実力がなければ、いきなり突き付けられたものを読むことはできません。

数年かけて頑張らなければならない、ハードルの高い試験だったようです。

【音と意味】

「い、ろ、は、に、ほ、へ、と」これは番号です。江戸時代から使っていた番号です。

音が並んでいるだけで、なんのことかわかりません。

しかし「いろはにほへど、ちりぬるを、わがよたれそ、つねならむ」と読めばどうでしょう。

意味が乗ってくるので、単なる音ではなくなります。

中身が分かるので、読む方もことばの調子が変わってくる。ここなんです。

いくら幼稚園児、小学生といえども、わけもわからずに音だけ読めと言っても無理です。

やはり意味内容が分かるように読んでゆかないと無理です。

「素読」というのは、そういうことです。意味も伝えられるような読み方をします。

一例を上げます。江戸時代はこう読みました。

「子曰く」を、今では「しいわく」と読みますが、江戸時代はこう言っていました。

「あなつのたまわく」。

「あなつ」とは何か。孔子の孔は「あな」という字です。

「子」を「つ」と読むのは、音の特殊の読み方で、「子」この字自体は男性に対する敬意を表すものです。「あなつ」は「孔先生」ということです。ですから、「子」を「し」ではなく、「あなつ」と読めば、みんな孔子のことだとわかりました。

そして「曰く」は言う。しかし「のたまわく」となれば、敬語表現ですから、「おっしゃった」となります。

「あなつのたまわく」は「孔先生はこうおっしゃられました」と理解できます。

これを「子曰く」「しいわく」という音だけだと、意味は分かりません。

「丑」を「つ」と読むのは、音の特殊の読み方で、「子」この字自体は男性に対する敬意を表すものです。「あなつ」は「孔先生」ということです。ですから、「子」を「し」ではなく、「あなつ」と読めば、みんな孔子のことだとわかりました。

かつては、意味も同時に載せながら読んでいました。これが「素読」です。これは学力がないとできません。

ただ音を読めばいいというのは誰でもできます。中身まで教えるように読むには特殊技術が必要です。しかし、現代ではそれは問いません。それもいいかと思えます。

本来はそうではなかったことをご理解ください。

【ことばの選び方】

それでは、どこまで「素読」をすればいいかというのも問題です。

『論語』は五百もの章が並んでいます。全部読む人はなかなかおりません。

日本の有名な古典『源氏物語』もそうです。全部で五十四帖あります。

最初の「桐壺の巻」から最後まで全部読んだ人は、まずおりません。国語の先生でも読んだ人はいないでしょう。第一帖から読み始めて、だいたい「須磨・明石」までゆきます。第十三帖です。このあたりまで読んで終わりにしてしまいます。しかし、これで重要な人物もほとんど登場しますし、話も大筋わかります。ですから、これで源氏を読み終わったとします。

『論語』も同じです。全五百章を読む人はおりません。

大体最初の二篇「学而第一」「為政第二」、そのあたりで終わりです。この学而・為政篇までに重要なことばが大体出ています。ですからここで『論語』卒業となってもおかしくありません。全部読まなければと気負わず、もう少し気楽に考えていただきたいと思います。

さて、子どもに「素読」を行う場合に、『論語』の文章を読めというのは無理です。

そこで『論語』の中から、これだと思うことばを抜き書きして、それを子どもに読ませることがいいかと思います。

次に示したのは、実際に私が孫のために選んで書いたものです。

参考
ろんご

一、まずおこなう。
二、うむことなかれ。
三、おんこちしん。
四、せつさたくま。
五、いかりをうつさず。
六、とおくにあそばず。
七、もとをとむ。
八、ちしやはまどわず。
九、じんしやはうれえず。
十、しせいめいあり。

参考

十一、けいていにゆうに。
 十二、てんめいをおそる。
 十三、おもいよこしまなし。
 十四、ひろくぶんをまなぶ。
 十五、つつしみてしん。
 十六、きおうはとがめず。
 十七、のべてつくらず。
 十八、とくこならず。
 十九、がくをこのむ。
 二十、げんにつつしむ。
 二十一、かもんをはずす。
 二十二、かがくしてじょうたつす。
 二十三、ともあり。えんぼうよりきたる。
 またたのしからずや。
 二十四、じはたつするのみ。
 二十五、こうげんれいしよくすくなしじん。
 二十六、こうせいおそるべし。
 二十七、くんしはしつなるのみ。
 二十八、くんしはうつわならず。
 二十九、いりてはすなわちこう。
 三十、わしてどうぞず。
 三十一、いありてたけからず。
 三十二、にんおもくして、みちとおし。
 三十三、びんにしてがくをこのむ。

これを読ませました。非常に短いものばかりですから読めます。幼稚園児になると、もうひらがなは読めます。時間にしてほぼ一分くらいです。意味をときどき訊きますので、私が教えます。たとえば、「ひろく ぶんを まなぶ」。幼児は学ぶということばがわかりません。「勉強すること」と言っ、教えてやると理解できます。子どもには、こういうひらがなの、短い『論語』がよろしいですね。幼稚園児でも十分読めます。もう少し成長すると、漢字にふりがなをつけたものにします。漢字が入ると理解が深くなります。子どもでも、漢字から類推し、様々なことを問いかけます。こういったものをご自分でお作りになるといいでしょう。

【短い句の抜き出し】

私は、長い文章を読むという「素読」には、あまり賛成しません。長い文章ですと、意味が分からなくなります。短い一句で読めるものならば、ほぼ意味をつかめます。こちらも説明がしやすい。これなら意味と発音が同時に理解できます。やたらと長い文章を読ませればいいというものではないと思っています。

テキストは、自分で『論語』を読み、自分で選んで作ることをおすすめします。

子どものためにテキストを作るということによって、自分の勉強になります。

今回は「素読」というものについてお話ししました。